



↑桜咲き誇る興国寺。写真⑤にある県指定文化財の仏殿（観音堂）のそばで咲くのが現在の「墨染の桜」。

**將軍への道開く
雪辱誓った再起点**

室町幕府初代・足利尊氏は、將軍となって間もなく、国家安泰と戦死者供養のため、弟の足利直義と全国66か国に安国寺を設置します。その中でも最初に安国寺に指定し、第一位の位置づけで領地を寄進したのが、興国寺でした。

その多くが交通の要衝地にあり、幕府の軍略拠点の一面も強かった全国各地の安国寺。三方を山に囲まれ、城郭のような配置が特徴の興国寺もその面影を色濃く残しています。

ではなぜ、興国寺が足利尊氏から破格の扱いを受けたのか—— それにまつわる尊氏の

その「墨染の桜」は一夜にして咲きました。勝利を確信した尊氏は、勝ち戦を収めながら勢力を拡大し、京へと東上。ついに征夷大將軍となって室町幕府を開いたという物語が今に伝えられています。

足利尊氏が京へのリベンジを誓い、雪辱を果たした再起の出発点とも言えるこのエピソードは、その後、多くの人の心に響いていきました。

←尊氏が武運を占ったと伝わる「墨染の桜」。世代交代を経て若い木が育っている。



墨染の桜

その伝説と物語をたどる

九州へと落ち延びた足利尊氏が、この地で再起を誓う——
尊氏にまつわる言い伝えは枚挙にいとまがない興国寺（上野）。そこに残されている「墨染の桜」の伝説。
尊氏が再度奮起し、覇者となった出発点とも言えるエピソードに迫ります。

身を隠した尊氏が京への再起をかけた戦運を占った



【あしかが たかうじ】
足利 尊氏
[1305 - 1358]

室町幕府初代將軍。征夷大將軍に任じられた後、国家安泰祈願のため、弟・直義とともに全国66か所に安国寺を設置。高僧であった無隠元庵との親交も厚かったと伝えられ、数々の尊氏伝説が興国寺に残されている。
(征夷大將軍足利尊氏公像／栃木県足利市、足利尊氏像／東京大学史料編纂所蔵)



尊氏にまつわる伝説

馬蹄石

【ばていし】



足利尊氏が乗った馬のひづめ跡と伝わる馬蹄石。山門へとつながる長い参道の途中にある。細く延びた上り坂の参道は、寺の防御の役割も担った。

尊氏ゆかりと伝わる

千手観音座像

【せんじゆかんのんざそう】



「尊氏の守り本尊」との説もある千手観音像は無隠元庵が京から招いたものと伝わっている。県指定文化財の仏殿に安置され、年一度ご開帳される。

県指定文化財

興国寺文書

【こうこくじもんじよ】



足利尊氏や足利直義兄弟の寄進状などを収めた興国寺文書2巻。安国寺に関する最も古い文書を含んだ全国的にも貴重な資料。(県指定文化財)

尊氏を物語る

尊氏の隠れ穴

【たかうじのかくれあな】



ここで再起を図った足利尊氏が身を隠したと伝わる境内の隠れ穴。経年の土や葉の堆積もあり、以前はさらに大きく深かい穴だったといわれている。

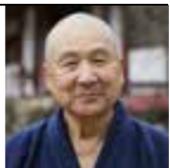
ここには尊氏公の高い志が宿っています



↑要害の地にあり、外堀や石垣、内堀など、城のような造りが特徴の興国寺。→無隠元庵禅師座像(県指定文化財)



歴代藩主に庇護されてきたこの興国寺には、古くから多くの立志の人々が足を運んできました。ここに尊氏公の志と元庵禪師の徳が宿り、人々を導いているように思えてなりません。数々の寺宝や伝説が物語るメッセージを若い世代の方々に受けとめていただき、高い志を持って欲しいと願っています。



天目山 興国寺 住職 **横山 哲志**さん

細川幽斎

墨染めの花見

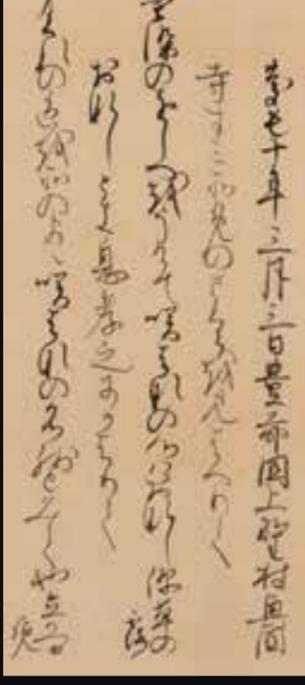
「古今和歌集」の奥義を秘伝する「古今伝授」の唯一の継承者であった細川幽斎。かつて足利家に仕え、将軍のブレインとしても活躍しました。その当代随一の文化人が、足利尊氏ゆかりの桜と向き合います。



「興国寺文書(県指定文化財)」に収められている細川幽斎の自筆と思われる詠歌の短冊

すみ染のをしへをうけてさく花の

心はおなし ふか草の露 玄旨



紅糸威腹巻

細川幽斎所用の現存唯一の甲冑。幽斎は、剣豪・塚原卜伝から学んだ剣術をはじめ、弓術や馬術の認可や相伝を得、武芸百般に通じた。茶道を千利休の師・武野紹鷗に学び、和歌・連歌・蹴鞠等の文芸を修め、さらに囲碁・料理・猿楽などにも秀でた文武両道の将だった。突進してくる暴れ牛の角を両手でつかんで止めたという怪力の逸話も残る。

(紅糸威腹巻/永青文庫所蔵)

衆妙集(抜粋)

細川幽斎の和歌集。歌数は約680首。慶長10年3月3日に細川幽斎が豊前国上野村興国寺の「墨染の桜」を見て詠んだ歌と息子・細川孝之にかわって幽斎が詠んだ歌「夕ぐれの色をそのまゝ 咲はなの名残とみてや 立かへる覧」が記されている。

(「衆妙集」二三四、二三五/永青文庫所蔵)

足

利将軍の側近を経て、信長・秀吉・家康と3人の天下人のもとで乱世を生き抜いた細川幽斎。あらゆる学問や芸能の奥義を極めた当時ナンバーワンの文化人でした。

特に和歌は、その奥義を伝える「古今伝授」の唯一の継承者であり、戦国時代に大きな足跡を残した日本の政治・文化史上の鍵となる人物です。

その細川幽斎が上野の興国寺を訪れ、足利尊氏ゆかりの「墨染の桜」と向き合いました。時は慶長10年(1605)旧暦の3月3日(現在の4月20日)。関ヶ原の戦功で息子の細川忠興が豊前小倉藩主として入国した5年後、細川幽斎が72歳で迎えた春でした。細川家に残されている和歌集「衆妙集」に、幽斎の四男で香春岳城主の細川孝之(21歳)を伴い花見をしたことが記されています。

「墨染の教へを受けて 咲く花の心は同じ 深草の露」。

「筆運びから見て幽斎自筆の短冊」と読み解く熊本大学の竹島准教授は「墨染の教へ(仏の教へ)を受けて咲く花の心は『墨染に咲け』と言われたあの京都の深草に咲く花の心と同じ。ここの深草にも涙のような露が置いている」と歌の意味を解説します。

当代随一の文化人、細川幽斎。その教養を駆使して時代の荒波を超えてきた幽斎が、在任の京都からこの地を訪れ、晩年に残した貴重な詠歌です。

【ほそかわ ゆうさい/ほそかわ ふじたか】

細川 幽斎(藤孝) [1534-1610]

戦国時代から江戸初期の武将・大名。あらゆる学問・芸能の奥義を極め、当代随一の文化人・歌人として有名。号は幽斎、法名は玄旨。室町幕府・足利将軍家に仕え、15代将軍・足利義昭の擁立に尽力。激動の時代を抜群の才能と政治的感覚でぐり抜け、近世細川家の祖となった。

(細川藤孝画像/東京大学史料編纂所蔵模写)

古今伝授の太刀

〔国宝 太刀 銘 豊後国行平作〕

細川家に伝わる国宝。関ヶ原の戦で徳川方に属した細川幽斎は、丹後田辺城で46日にわたり西軍を引きつけて籠城する。その際、石田方の兵が城を取り囲むなか、幽斎から古今伝授の奥義を受けた烏丸光広に贈られた名刀。(永青文庫所蔵)



古今伝授の間

水前寺成趣園(熊本市)の池のほとりにある茅葺の建物は、かつて京都御所内にあったもので、細川幽斎が八条宮智仁親王(後陽成天皇の弟)に古今伝授をした建物。大正元年に京都から移築され、この建物から見る風景が水前寺公園内で最も美しいと言われている。

(古今伝授の間/熊本県指定重要文化財)



古今伝授の心を垣間見る幽斎の詠歌



熊本大学大学院 准教授 竹島 一希さん

当代一の文化人であった細川幽斎。特に古今伝授の継承者として教養ある和歌を残しています。興国寺での幽斎の歌は、深草の山に埋葬された藤原基経を悼んだ古今和歌集の歌「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」(深草の野辺に咲く桜よ 心を持っているならば今年だけは墨染色に咲いてくれ)を本歌とします。幽斎も誰かを追悼したのかもしれませんが、この歌の作者が上野岑雄に当地の上野も意識したのでしよう。心の持ち様や人としての生き方も説いた古今伝授。仏教心を持つ「墨染の桜」にそれを見ると、興国寺をたたえています。

大藩を治める大大名家に

episode 04 関ヶ原に向けた幽斎の判断力

豊臣秀吉が病没後、徳川家康と石田三成が対立。決戦が迫ると細川幽斎は懇意にしていた徳川家康につきまします。結果、関ヶ原の戦功により、細川家は豊前小倉藩30万石(表高)へと大幅加増され、さらにその後、熊本藩54万石に移封加増。大大名として幕末まで藩を守り抜いていきます。



徳川家康 石田三成

光秀の頼みを断って出家

episode 03 本能寺の変後の幽斎の決断力

本能寺の変後、姻戚関係で盟友だった明智光秀の再三の協力要請を断り、剃髪して幽斎と名乗ります。さらに田辺城に隠居し、家督を嫡男の細川忠興に譲って、光秀の娘であるガラシャを幽閉。窮地に陥った光秀は羽柴(豊臣)秀吉と戦い敗死。その後、細川家は秀吉に重用されます。



豊臣秀吉 明智光秀

天皇が助けたかった才能

episode 05 幽斎の唯一無二の知力

関ヶ原の戦いに際し、細川忠興が出兵した後、西軍約1万5千人の大軍に囲まれた田辺城。残された約5百人の城兵は圧倒的不利な中、細川幽斎のもと約1か月半籠城します。その援軍の見込みもない危機を救ったのが、後陽成天皇でした。



後陽成天皇

歌道の奥義を伝える「古今伝授」の唯一の伝承者だった細川幽斎。その相伝の廃絶を憂慮した後陽成天皇は、両軍に講和の勅命を出し、開城へと導きました。



↑大軍に包囲された田辺城、幽斎の弟子の一人だった八条宮智仁親王は2度にわたり講和を働きかけたが、細川幽斎はこれを謝絶した。(田辺籠城図/大泉寺所蔵) ←幽斎のもと籠城戦が行われた田辺城(京都府舞鶴市)

幽斎、忠興、忠利。細川三代が残した足跡

田辺城の戦いで、まさに「芸は身を助く」を体現した細川幽斎。近世歌学を大成させた当代きっての文化人であり、茶道では利休と兄弟弟子でした。その素養は子の忠興に受け継がれ、茶人大名として上野焼を興すことにもつながっています。基盤となる関係を作り上げた幽斎、戦国大名の地位を確立した忠興、そして近世大名家として組織的な国づくりを整えた忠利。幽斎から続く三代による細川家の足跡は、この地に今も深く残されています。



北九州市立自然史・歴史博物館名誉館員 永尾 正剛さん

細川忠利

画像 | 足利義輝、足利義昭(東京大学史料編纂所所蔵) / 織田信長(長興寺所蔵) / 細川忠興、明智光秀、豊臣秀吉、石田三成、徳川家康、後陽成天皇(東京大学史料編纂所所蔵模写)

当代随一の武家文化人

文武両道

細川幽斎を物語るエピソード

戦国の世を抜群の才能で生き抜いた細川幽斎。その質実剛健かつ伝統文化を重んじる家風は、忠興の「上野焼」の創始にもつながっています。ここで劇的な生涯の「その時」を振り返ります。



細川幽斎

天下人三人に仕える

episode 02 幽斎の高い先見力

足利義昭を将軍にするため、明智光秀を通じて織田信長を頼った細川幽斎。足利義昭を奉じた織田信長の上洛に従い各地で転戦します。やがて足利義昭と織田信長が対立すると、信長に仕える道を選びました。のちに織田信長の仲介によって、嫡男・細川忠興と明智光秀の娘・玉(ガラシャ)が結婚。その後、細川幽斎は卓越した将来を見通す力で、豊臣秀吉、徳川家康と三人の天下人に仕えていきます。



織田信長



次期将軍を救出して奔走

episode 01 あきらめない幽斎の突破力

幕臣として室町幕府14代将軍・足利義輝に仕えていた細川幽斎。しかし、将軍・義輝は突然家臣から討たれてしまいます(永禄の変)。細川幽斎は、義輝の弟(足利義昭)をすぐさま幽閉先から救出。義昭を将軍にするため、油も買えないほど貧困する中、諸国の大名を頼って奔走しました。



足利義昭

足利義輝

5人の子に恵まれた細川忠興とガラシャ。細川ガラシャは関ヶ原の戦いに際して石田三成方からの人質の強要を拒み、壮絶な死を遂げる。のちに豊前小倉藩主となった細川忠興は小倉城を本格築城。上野焼を創始した。

利休七哲の大名茶人・細川忠興(三斎)

